



小田小だより

平成26年 3月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号 TEL 045(775)3011

<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

横浜市立小田小学校



あれは嘘ではない。愛なのだ！

～子どもたちの心の育ちに思いを寄せて～

学校長 木村 昭雄

電車の中は、少し混んでいました。空いた席はなく、七・八人の人が立っていました。私の向かいに中学校1～2年生くらいの女の子が出入り口のすぐ横の席に座って、文庫本のようなものを読んでいました。大抵は漫画か雑誌を読んでいることが多いのに、珍しいなと思って見ていました。

電車が止まって、五・六人の人が乗ってきました。その中に、片手に荷物を持ったお年寄りの女の人が出て、その女の子の前のつり革をもった途端、その女の子はすっと立ち上がりました。お年寄りの女の方は、「いえいえ、結構です。大丈夫ですから」と断りました。すると女の子は、「どうぞ。私は次の駅で降りますから」といって、もう一つ前の方のドアの方に移って行きました。お年寄りの女の方は、「そうですか。有り難う」と言いほっとしたように頭を下げて座りました。

私は、優しい女の子だなと思って、その女の子の姿を目で追っていました。ところが、電車が次の駅についても、その女の子はドアの所に立ったまま降りませんでした。だんだん混んでくると出入り口の横で、その女の子は本を読み続けているのです。その次の駅でも降りませんでした。私はそこで降りたので、そこまでは見ていません。だから、その子がどこで降りたのか分かりません。確かに「次の駅で降りますから」と言ったのに、次のその次の駅に来た時にも降りなかったことだけは間違いありません。この女の子は嘘を言ったことになりません。なぜ、こんな嘘、こういう言い方をしたのでしょ。

電車から降りて、私はしばらく歩けません。何気ない一言を添えて、相手を思いやるあの女の子の心の深さに感動してしまいました。「あれは嘘ではない。愛なのだ」と確信したのです。「私は次の駅で降りますから」と相手の人の気持ちを楽にしてあげる「思いやり」、相手の人の気持ちに寄り添う、優しさに溢れた振る舞いに胸を打たれたのでした。

この話を田舎でお寺の住職をしている高校の友人にメールで伝えました。最後に「ほんとうは私が譲ればよかった。しなかつたので心が痛んだ」と添えました。すると友人の住職は、「無財の七施のうちの一つ、『床座施(しょうざせ)』をしたその女の子は立派だ。こんな子が増えてくれれば、世の中、もっと明るくなる。しかし、木村も立派な布施をしたことになる。人が人に施しをしているのを見て、『えらいなあ』と思うことができれば、施した人と同じである。偉い人は言われている。『共に喜び』という世界で『随喜(ずいき)』という。安心したまえ」と教えてもらいました。

実は、この出来事を目にした時、ある詩を思い出しました。ご存じの方もいらっしゃるかもしてません。吉野弘の「夕焼け」という詩です。右上に記しましたのでご一読ください。

学校ではこれからも、「心の育ちを支援する」ことに力を注いでいきます。相手を思いやる心が優しさであり愛なのだということを、子どもたちの心に届け続けていきたいと思っています。

本年度も残すところあと僅かとなりました。保護者の皆様、地域の皆様にはいろいろな場面で大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

いよいよ3月20日は「第23回卒業証書授与式」の日です。卒業生の皆さん一人ひとりが、自分と相手を思いやる「愛」をもって未来に向かって進み続けるよう祈念しております。

いつものことだが
電車は満員だった。
そして
いつものことだが
若者と娘が腰をおろし
としよりが立っていた。
うつむいていた娘が立って
としよりに席をゆずった。
そそくさととしよりが座った。
礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。
娘は座った。
別のとしよりが娘の前に
横合いから押されてきた。
娘はうつむいた。
しかし、又立って
席をそのとしよりにゆずった。
としよりは次の駅で礼を言って降りた。
娘は座った。二度あることとは言う通り
別のとしよりが娘の前に
押し出された。
可哀想に娘はうつむいて
そして今度は席を立たなかった。
次の駅も
次の駅も
下唇をキュッと噛んで
身体をこわばらせて・・・。
僕は電車を降りた。
固くなってうつむいて
娘はどこまで行ったろう。
やさしい心の持ち主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って
やさしい心の持ち主は
他人のつらさを自分のつらさのように
感じるから。
やさしい心に責められながら
娘はどこまでゆけるだろう。
下唇を噛んで
つらい気持ちで
美しい夕焼けも見ないで。